



## 将棋の起源および大型将棋の呪術性に関する研究

大阪電気通信大学 総合情報学部

教授 高見 友幸

### 1. はじめに

将棋の起源と伝承に関する問題は、近年までほぼ未解明の状態だったと言ってよい。その原因としては、古文書や出土駒から得られる古い時代の情報が少なかったということが大きい。また、次のような先入観の存在も影響したであろう。

- (1) 現代将棋と類似する小将棋が原初の将棋である。
- (2) 将棋は古代においても遊戯である。

そのため、存在が広く知られていた大型将棋については、それが遊戯として成立していない(実際はこの考え方も間違っているのであるが)という理由も加わって、大型将棋が起源の候補になることがなかったのである。ところが、我々の最近の研究からは、上述の2点とは全く対立した次の命題が立証されつつある。

- (1') 原初の将棋は大型将棋であり、将棋の発展に伴って駒数は順次減り小将棋が成立した。
- (2') 原初の大型将棋も遊戯であるとともに、呪術としての機能を持つ。

我々の研究では、当初、大型将棋の遊戯性という観点から研究が始められているが、その研究過程で、大型将棋は本来的に呪術性を持つことがわかってきた[1]。ただ、呪術という題材の性質上、学術的な研究あるいは美学的な究明は必ずしも難しいというのが問題であった。

### 2. 将棋の駒と盤に見られる呪術性

大型将棋と呪術との結びつきは、いろいろな観点から言及できるが、その中で最も直接的で具体的な現れとして次の2点を挙げる事ができる[2]。

a) 摩訶大将棋の駒を、陰陽、五行、十二支の駒に分類することで六十干支を構成することができる。また、六十干支への同様の分類は、駒種が大きく異なる大大将棋についても成立する。

b) 平安京の条坊を南北19目東西17目の将棋盤とみると、摩訶大将棋(初期配置は横19目)については南北方向に、大大将棋(初期配置は横17目)については東西方向に、ぴったりと駒を並べることができる。

上記a)で、もし大型将棋が純粋に遊戯だったとすれば、十干

や十二支の駒グループが現れることはあり得ない。六十干支の分類が2つの大型将棋で実現していること自体、すでに呪術としての将棋の現れであろう。

さて、将棋の駒に呪術性が含まれているとわかった以上、上記b)で、平安京の条坊と将棋盤とをきちんとした対応があることは、不思議でもなく偶然でもない。図1に、大大将棋の駒が平安京の条坊に並んだ様子を示した。ここで注意すべきことは、図1の平安京が瀧良貞子氏の提起した第一次平安京[3]でなければならぬという点である(ただし、本稿では、宮城を北闕型と想定している。この場合、通説の平安京よりも南北の長さは2町だけ短い)。青龍と白虎の駒の位置に注目されたい。図1からわかるとおり、青龍は東の端、白虎は西の端にあり、五行と色彩の関係も一致している。二条大路の朱雀門の位置に靖旗の駒が立つ。また、大内裏の形に沿うように左将、金将、銀将、銅将の駒が並ぶ。

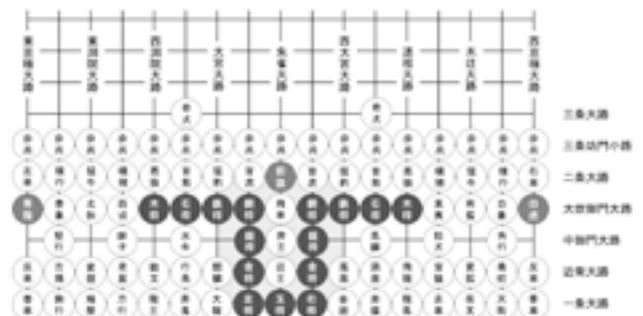


図1. 第一次平安京と大大将棋の初期配置

### 3. 第一次平安京における朝堂院の復原

前節では、大型将棋の盤と駒に見られる呪術性の一端を示したが、本研究では、盤と平安京の条坊との合致について、平安京の側からの検討も行った。平安京が御倉場直に基づいて造営された都であるとされているものの、現状の平安京の復原結果からは呪術的要素が大きく現れているとは言い難い。平安京自体の呪術性を究明することは、平安京と密接な対応関係にある将棋の呪術性を同時に立証することになるであろう。

本研究にて得られた平安宮の復原の概要を図2に示した。平安宮には、北端の一条大路を宮城内部の道として含めている。復原

は、陽明文庫本「宮城図」に記載される寸法と発掘調査による実測値から推定されている。図2は第一次平安京の復原であることに注意されたい（導出の詳細については、研究報告書を参照のこと）。以下に、得られた復原の結果をいくつか列挙する。

- 1) 大極殿は大内裏の北端からちょうど200丈の位置にある。
- 2) 大内裏は正方形（東西幅384丈、南北幅383丈）。
- 3) 大極殿院の大きさは一辺40丈の正方形。
- 4) 朝庭は建造物のない一辺40丈の正方形の広場。
- 5) 朱雀門から昭慶門までは実測のとおり200丈であるが、この間には40丈の正方形5つが連続して並ぶ設計となっている。
- 6) 会昌門から応天門の櫓閣までの領域も一辺40丈の正方形

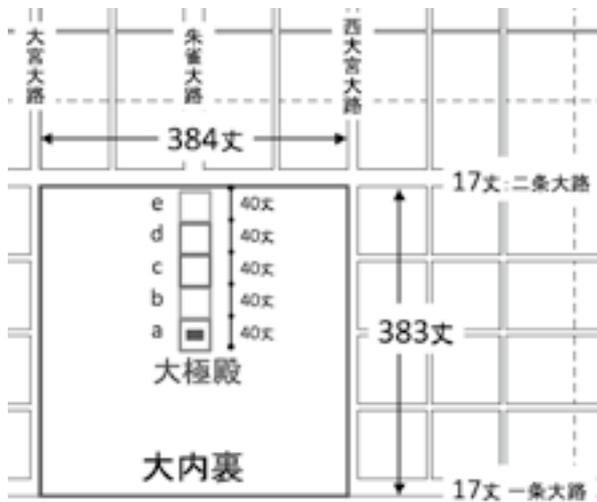


図2. 第一次平安京の大内裏と大極殿 上が南の方向である。

#### 4. 天円地方の思想

前節で一例として示した、平安京に現れる正方形の階層構造は、古代中国における天円地方の思想と深く関連していると思われる。天空の様相を地上の都に写すというのが階層の思想である[4]。さらに、その方形の都の全体を、手元で一望できる将棋盤に再現したものが将棋である。将棋は天子南面して見る遊戯であり、対局は天皇の御前にて東西方向で行われた。では、将棋が呪術であるとはどういうことか。天（天帝）と地（天子）との通言により、盤上遊戯の対局で神意を聞くというのがそのひとつの回答となるであろう。この様子を、図3に模式図として示した。天円地方の考え方が将棋に反映されているという点においては、日本の大型将棋と同様、中国象棋と都城との対応にも現れていることに注意されたい（研究報告書参照）。

#### 5. まとめ

大型将棋の呪術性の究明は、将棋の駒および将棋盤というふたつの観点からのアプローチに分かれる。駒については、駒名と動きに注目することで、駒を五行、陰陽、十二支の駒グループに分類することができる。この成果は遊戯史的な考察（ルールの解

明）に負うところが大きい。一方、将棋盤に関する呪術性については、大型将棋の将棋盤と第一次平安京の条坊が完全に合致するという発見が出発点となっているため、本論文では、第一次平安京の存在についても検討した。将棋の呪術性は、将棋盤の本体である平安京それ自体が持つ呪術性により検証されたものと考ええる。また、この呪術性の問題と連動し、原初の将棋は摩訶大将棋であり、その伝承は遅くとも9世紀中頃であると推定できる。

最後に、本研究で派生して得られた非常に興味深い2件で短く触れておきたい。まず、平安京の初期の造営では、地面を測る物差し（1尺=29.8cm）の他に、朝庭院を測る物差し（1尺=28.1cm）が存在する可能性を提起した。これは法隆寺や三十三間堂で使用されたとされる物差しと一致する。この物差しは倭国で使われた尺で、百済の道教の流れを組むものとする見方がある。

2件目は、大嘗祭のときに大極殿の中に置かれる高御座と、舒明天皇陵や天智天皇陵に見られる八角形の墳丘との関連性である。平安京は自身の方形の中に、大内裏、大極殿院、大極殿の方形の階層構造を作り、その階層の頂点に八角形の高御座を置かれる。こうした構造は、多層の方形壇の一番上が八角墳である天皇陵の構造（上八角下方墳）と類似するのである。天円地方の思想において、八角形を天の円形と地の方形を結ぶ仲介の形と見るならば、方壇の上の八角墳、大極殿の中の高御座は、天と地との通信のコネクタという意味合いをもつのかも知れない。



図3. 平安京の条坊と天円地方の模式図（妹尾達彦氏による「宇宙の都」を原図として、高見が作図）。

#### 参考文献

- [1] 高見友幸、摩訶大将棋の復刻 - 古代日本の大型将棋に関する考察、大阪商業大学アミューズメント研究叢書第19巻、2019。
- [2] 高見友幸、中根康之、木子香、原久子、呪術としての大型将棋に関する考察、大阪電気通信大学人間科学研究、Vol.22、13-24、2020。
- [3] 瀧良貞子、初期平安京の構造 - 第一次平安京と第二次平安京、京都市歴史資料館紀要 創刊号、1984。
- [4] 妹尾達彦、長安の都市計画、講談社選書メチエ、2001。